

現代文の授業中、生徒の机上に国語辞典が載っているのは理想だが、重い、かさばる、使わない等々の理由を挙げて、持ってくる生徒が少ないのは残念である。国語辞典なら、授業が退屈なときに引いて遊べて叱られることもないのに、と思うのだが。だから新しい教材に入るとき、家庭学習で語句の意味調べをさせ、授業中に確認するのが常である。私自身は授業に必ず携行し、事あるごとに引いて読み上げる。教卓の横の生徒が手を伸ばし、勝手に私の辞書を引いていることもある。

私が教えている生徒たちは、抽象的な概念を表す語彙が特に苦手である。教材「コインは円形か」(佐藤信夫)では、「認識」「論理」「実証的」などの言葉に拒否反応を示す。一応辞書は引いてあっても、十分理解できず本文解釈の妨げとなっていることが多い。この中で特に「人間の認識一般」「発見的認識」「認識的な思いやり」と繰り返して使われる「認識」については、文章理解の鍵となる語なので、丁寧に確認することになっている。まず「認識」の辞書的な意味を問う。「物事を

【教材「コインは円形か」の授業】

## 国語辞典で「認識」を引く

●愛知県立東浦高等学校教諭 小崎早苗 (こざき・さなな)

正しく理解すること」「他のものと区別すること」等の答えが返ってくる。板書して「認識」と「思うこと」との違いを確かめ、「確認」「識別」等の熟語作りをし、「認識」の意味を認識させる。

次に「自分の認識が——したがって自分の言葉が——」という部分に触れ、なぜ「認識」「言葉」なのかを考える。「言葉」の意味を調べ始める生徒もいるので、読み上げてもらい板書する。「認識」|| 「他のものと区別すること」を手がかりに、「認識」と「言葉」の共通点を挙げさせると、「犬」という言葉は、犬を他の動物と区別している」などと意見が出てきて、生徒たちは、言葉によって物が分節されることに気づき始める。このような作業を通じて、彼らは「言葉が認識を示す」ということを多少なりとも実感するようである。

抽象的な語彙の理解には、辞書で意味を調べ、その意味をまた辞書で調べ、という繰り返しを要求されることが多い。たまには国語辞典を開いて一語の解釈に時間をかけ、生活体験と結びつけて実感させる授業も、楽しいと思う。

定時制の生徒に辞書を引かせるのは大変だ。「メンドクセー」「いやだあ」「引いたことないよ」などブーイングの数々。それにも負けず、そなえつけの国語辞典を用意させる。「では、さつそく質問。教科書の文章に出てくるとばなら国語辞典にはのっているだろうか。」とたずねる。「それは当然のっているよ。」

そこで、三省堂『新編国語総合』の教材「もう一つの時間」(星野道夫)をとりあげることにする。ここから「よし、キャンバス(P11L3)」ということばを調べてみよう。ところが「キャンバス」はのっているが、「キャンバス」はのっていないことがわかる。「えー、役に立たない!」という非難の声。実は「キャンバス」は見出し語にはなっていないが、「キャンバス」を引くと「(油絵の)画布。キャンバス。」と出てくるのだ。

ここから、二つのことがわかる。一つは、教科書程度の文章に使われていることばでも国語辞典にすべてがのっているわけではないということだ。

【教材「もう一つの時間」の授業】

## 国語辞典で「キャンバス」を引く

●東京都立雪谷高等学校校定時制教諭 宮岡良成 (みやおか・よしなり)

ページ数に制限がある以上、あたりまえといえはあたりまえのことだ。新語や流行語は採用されにくい。辞書が流通し始めたときにそのことばが死語になっているかもしれないからである。「キャンバス」はもともと日本語では「キャンバス」だった。画材用語でも「キャンバス」である。「キャンバス」は新しい表記のしかたである。しかし、星野道夫氏の持つ語彙体系ではおそらく「キャンバス」が自然に出てきたのだろう。

もう一つは、今回のように、せっかく語釈にのっている見出し語を知らなければ(思いつかなければ)たどりつかないということである。こうした現象は外来語だけではない。ところが、現在の電子辞書やインターネットの辞書では語釈からも検索することができるので、「キャンバス」を検索すれば「キャンバス」にたどり着くことができる。だから、こうした心配はいらない。

大事なことは、辞書を引く習慣をつけさせること。生徒相手に苦心惨憺の毎日である。

現代文の授業で短歌を教えようと思う。下調べをしながら、いい歌だなとしばし感慨にふけったりするが、授業には私情はさし挟まない。ほとんどの生徒にとつて、短歌は興味が無い。短歌の授業は海抜0メートルからの登山に等しい。坦々とオーソドックスに授業を進めるにしくはない。

短歌はおおむね文語定型である。おまけに短い。そこで、歌に忠実に散文に直させる。

玄海の春の潮のはぐくみいろいろくづを売る声  
はさすらふ  
岡井隆

「はぐくむ」「はぐく」として、「いろいろくづ」は、まずわからない。辞書を引くと「①魚などのうろこ。②うろこのある動物。魚・竜など。」とある。「うろこ」と「いろいろくづ」がどこでどうして同じになったのか。鱗を引くと「古くは「いろいろこ」という注記がある。これで「いろいろ」が鱗になったことがわかる。「いろいろこ」のある生き物だから魚。ここで、すでに学んだ「羅生門」の知識を持ち出す。門のほとりにたたずんでいた「市女笠」とは、市女笠をかぶった女のこと、つまり換喩であった、

【短歌の授業】

## 国語辞典で「いろいろくづ」を引く

●湘南白百合学園高等学校教諭 柳宣宏 (やなぎ・のぶひろ)

と。まあ、言わなくてもいいけどな。

ところで、「いろいろこ」は、どんなわけがあつて「いろいろくづ」になつたのか。こういう追求を生徒は好むので、どんどんやらせる。「こ」を引くと「名詞について親しみの気持ち伝える。」とあり、例として「あんこ」。一方、「くづ」は「屑。無用なものとして切り離されたり(略)役に立たなくなつたもの。」とある。確かに鱗は食わない。魚とは、役に立たない鱗をつけた生き物であつたか。そう考へると一首が、一気に生彩のない歌に見えてしまう。

ここで和英辞典を引く。鱗は a scale だが、鱗を取る remove the scales。食べるために身から削いで屑となつた鱗の山。それは新鮮であればあるほど光沢を帯びていたに違いない。一片なら「いろいろこ」、それが集まつた複数形が「いろいろくづ」ではないのか。そう仮定すると、この歌に歌われた魚は輝かしい色を帯びて見える。かくて「いろいろくづ」は、南海の春の光をふんだんに感じさせる、この歌のポイントであることがわかうというものである。

『奥の細道』の冒頭は、暗誦されることも多く、「そぞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取るものにつかず」という一節もおなじみだろう。さてしかし、「道祖神」は今でも路傍に見ることのできる神様だが、「そぞろ神」とはどのような神様だろうか。教科書には「なんとなく人の心をそそのかす神」などと説明があるが、そんな神様がいろいろだろうか？ ためしに『詳説古語辞典』を引くと……、載っていない。そう、ほとんどの辞書に「そぞろ神」はないのである。載っていたとしても、教科書の注と同じ様な説明と、『奥の細道』の用例があるのみ。

辞書を引いてもわからない、のではなく、このことからわかってくることもある。つまり、「そぞろ神」なる語は、『奥の細道』以外（以前）には用いられた形跡がないらしい、ということ。だとすれば、どうやら「そぞろ神」という神様は、芭蕉のいわば創作だということになる。「そぞろ神のものにつきて……、道祖神の招きにあひて……」と、対句風にし、誰もが知っている「道祖神」と並べることで、何だかそんな神様もいたような気

【教材『奥の細道』の授業】

## 古語辞典で「そぞろ神」を引く

●相模女子大学教授

風間誠史 (かざま・せいし)

にさせてしまうのである。これこそが『奥の細道』の魅力であり、芭蕉の詩人としての力なのだ。辞書を超えたところに「文学」の世界はあるのだが、それに気づくために、辞書を引くことが必要なのである。

さて、それにしても芭蕉はどこから「そぞろ神」なる神様を創造したのだろうか。『詳説古語辞典』の「そぞろ」には「すずろ」に同じ」とあるので、「すずろ」を見る。そこには原義や派生した様々な意味が載っているのだが、大事なものは用例である。この語が、どんな文脈で用いられてきたのか。そう思ってみると、「すずろ」の最初の用例に気づく。「むかし、男、すずろに陸奥の国までまどひにけり」(伊勢・一一六)とある。あれ、これは『奥の細道』と関係があるのでは？ これだけで断定はできないが、芭蕉をみちのくの旅に誘ったもののひとつが、『伊勢物語』であり、「すずろに」惑って行った昔男だったのではないか、という想像をめぐらせることはできる。辞書はそんなふうには、作品の読みをふくらませる手助けもしてくれるのである。

日本語で遊ぶことが流行っているらしい。『大辞林』初版で「遊ぶ」を引くと、一番はじめに「仕事や勉強をせず、遊戯などをして楽しく時を過ごす。」と定義してある。ところが三省堂版『古典講読』の『源氏物語』の冒頭部では、「遊び」に「管絃の遊び」という脚注がついている。受験対策では、古語の「遊び」は「詩歌管絃」と、条件反射のように覚えさせるのだが、何故そうなのか、こうなるとのんびり遊んでばかりはいられない。古語辞典の出番である。

『全訳読解古語辞典』第二版は、見出し語に関連して、「語義要説」「読解のために」「参照用例」などいろいろな工夫がしてある。「あそび」には、関連語の最後に「読解のために」がついている。その語義を見たら、同じページの「あそぶ」にも目を通しておこう。(ちなみにこの語は、カラー見出しで、最重要語扱いになっている。「語義要説」「読解のために」「参照用例」全てがついている。)もともとの意味から「管絃・歌舞などの遊び、楽しみ。」が出てくるいきさつがよく分かる。ところで、「遊び」の類語、対義語、縁語はいっ

【教材「源氏物語」「桐壺」の授業】

## 古語辞典で「遊び(遊ぶ)」を引く

●金城学院大学教授 中西達治 (なかにし・たつはる)

たい何だろう。例えば「遊び」の現代語の類語は「趣味」、対義語は「仕事や勉強」、縁語は「ゆとり」というところか。古語だとどうなるのか。「趣味」の古語は何だ。「仕事や勉強」も、ことはそれほど単純ではない。「詩歌管絃の遊び」のためには、しっかりした技術の習得が欠かせない。「遊びのための勉強」という逆説的な現象が起きてくる。「仕事」の方はいいとして、ではこれを古語に置き換えるとうなるのか。これも結構難しい。思いついた古語を、拾い出して意味を確かめてみると面白いのではないだろうか。「ゆとり」の方はどうだろう。これはそのままいけそうな気がするのだが、さて、古語辞典にあるのかどうか。「ゆとり」という概念、意外に新しいのかもしれない。

時にはこんな古語辞典の利用法はどうだろう。勉強を遊びにかえる。そういえば、「あそび」関連項目の最後には、『梁塵秘抄』の「遊びをせんとや生まれけん／戯れせんとや生まれけん／遊ぶ子どもの声聞けば／我が身さへこそ揺るがるれ」があげられていた。

とにかく漢和辞典を引いてみようというところから、私の「漢和辞典」の授業は始まる。

では、何を引くのか？ 自分の名前を引くのである。最も身近な漢字である自分の名前に使われている漢字を引き、どういう意味があるのかを調べ、どんな思いが込められているのかを考える。その中で漢和辞典を読む体験をする。

次のような項目を用意する。

自分の名前に使われている漢字について

1 なりたちを調べる。

自分の名前の漢字がどのようにできたものかを知る。ここで当然のこととして「形声」ってなんだ？ ということになり「六書」に触れることになる。

2 読み方（音読み・訓読み）を調べる。

ここで常用漢字音訓表にない読みを発見することになる。漢文を学習するうえで、この表外の読みが重要なのである。

3 意味を調べる。

ここでもふだん気づかない意味を発見するこ

【「漢和辞典入門」の授業】

## 漢和辞典で「自分の名前」を引く

●駒場東邦中・高等学校教諭

池田宏 (いけだ・ひろし)

となる。その意味が自分の名前の意味であったり、込められた思いだったりする。

4 熟語を読み、気に入った熟語を三つ挙げ、その意味を調べる。

これは自分の名前を好きになるための課題だ。かつて「俺の名前めっちゃかっこいいすよ」と大喜びしていた生徒がいた。

5 調べた結果、自分の名前がどういう意味になるかを考える。

二字以上の名前場合は、ここで一字一字の漢字を単語としてその意味の組み合わせを考えることになる。

6 名付けた人が、自分の名前に込めた思いを聴き取る。

もうすでに聴き知っている生徒もいるだろうが、もう一度自分の調べた結果と照らし合わせてみるとおもしろい。

以上が私の「漢和辞典入門」の授業である。「へえ、漢和辞典ってこんなことも載ってるんだ」という発見を期待しての授業である。

古来、日本と中国において、漢字という共通の文字が使われ続けた。そのことが、日本では、中高生の段階から外国生まれの古典を学習できるというすばらしい状況を生んでいることは論を俟たない。例えば、三云堂『高等学校 古典 漢文編』の導入教材の一つ「管鮑之交」では、高校生にとって日常馴染みが薄そうな字としては、「嘗」「賈」ぐらいであろう。その他（原典とは新旧の字体の違い等は存在するもの）見慣れた字ばかりである。このことは無論学習者に大いに強調すべき点である。

しかし一方で、同じ字であっても、日常生活において頻出する語義・用法と、漢文読解において鍵となる語法・句法とが異なる場合も多い。これらの差異を、用例を通して押さえていくことが漢文学習において重要であることを、漢和辞典を用いながら学習者に意識させたい。

例えば、「管鮑之交」の最初の部分、「管仲、字夷吾、嘗与鮑叔賈。分利多自与」に注目すると、「与」が二度使われている。後者は、「あたふ」と読み、

【教材「管鮑之交」の授業】

## 漢和辞典で「与」を引く

●清泉女学院高等学校教諭 瀧康秀 (たき・やすひで)

「(利益を分ける際、自分に多く)与えた(分配した)」と解すべき例である。『全訳漢辞海』を引けば、「語義」の欄、「上声」動詞の「⑥授ける。

あたへる・アターフ。例玉斗一双、欲与亜父(玉のひしゃく一對を亜父に与えるつもりである(史記)の「与」と同様の意味であることを確認できる。これは日常馴染みの語法といえよう。一方、

「与鮑叔」の「与」は、「く」と読む例であり、「与」の句法の一つである。前置詞の説明に「①」ともい。▼句法3」とあり、句法3には、「い

いっしょに何かをしたり、動作が関係する対象を表す。例与操有隙(曹操と仲たがいでいた(資治通鑑)とある。「与操」の「与」は「動作が関係する対象を表す」の根拠を示している。「いっしょに何かをしたり」の直接根拠となる例文は省かれていますが、「与操有隙」と比較すれば、「与鮑叔賈」の「与」こそ、この解説の根拠となる用例の一つであることがわかる。

比較の眼差しを持たせ、あくまで漢文の用例に即して語法・句法を理解させたい。

『新明解国語辞典 第六版』で「やがて」を引く

年が改まり仕事が始まって間もない日のこと、「とんし」の「とん」に「て」と書いて何と読むのでしょうか、今読んでいる鷗外の文章にさかんに出てくるのですが、という読者からの電話を受けた。「頓死」の「頓」だから、「頓て」？

『新明解国語辞典 第六版』で「やがて」を引く。まず、一般的な漢字表記が「躑て」であることを確認。少し寄り道して漢和辞典を引けば、「躑」は「身」に「應(応)」を組み合わせた国字で「自分ですぐに応じる」意であることがわかる。『大字典』には、「身に應じてやがて行う義なり。故に身に應を合す」と明解だ。

語釈を読む。①事が進んで、あまり時間が経過したとは感じられないうちに△新たな局面を迎える(最終的な局面に至る)様子。「帰っていく友達の後姿は次第に小さくなり、見えなくなった/子供たちも成長し親もとから離れていく」②「雅」その状態のまま、時を置かず次の事態に移行する様子。「起きも上らず病み臥せり」

比較のために他の辞書を引く。すると、「そのうちに。おいおい。まもなく」おつつけ。まもなく。ほどなく。そのうちに。早晩。今に。」と、見事なまでにどの辞書も似た言葉で置き換えているだけ。「まもなく」を引けば「すぐに。ほどなく」と、いつまでたっても意味がわからない。

『新明解国語辞典』に③「雅」があるのはなぜだろう。用例の「やがて起きも上らず病み臥せり」は竹取物語。徒然草「名を聞くより、やがて面影はおしはからるる心地するを」。「やがて死ぬけしきは見えず蟬の声」という芭蕉の句も思い浮かぶ。なるほど「やがて」③では実感がわかない。意味に変遷があったことがわかる。③から①を見ると、「やがて」の中心義が、経過した実際の時間の長さが問題なのではなく「あまり時間が経過したとは感じられないうちに」にあることがよくわかる。「まもなく」との違いも明らかだ。さて、問い合わせの「頓て」。「頓」は「頓服・頓死」で「すぐに。にわか」の意。なるほど、それで「頓て」か。鷗外に限らず江戸・明治期にこの表記が盛んに使われていたのもうなずける。

(辞書編集担当者 吉村三恵子)

## 『三省堂 全訳読解古語辞典』で「おどろく」を引く

いわゆる「古今異義語」は、古典の初学者をまま悩ませる類の語であると思います。注意を怠ると推理小説のミスリーディングではありませんが、とんでもない方向に訳文を引つ張って行ってしまう。

「さうざうし」のように、音だけは似ていても意味は現代語の「騒々しい」とは真反対というような語はまだしも、中には現代語の語義で訳を試みたところ、一見正しそうに見えるという始末の悪い語もあります。「おどろく」もそういう語のひとつでしょう。

「おどろく」を『三省堂 全訳読解古語辞典』で引いてみましょう。冒頭に「語義要説」欄があります。この欄の基本的役割は、語の全体像を読者に示すことにあります。「物音や外的刺激に対してはつとする意が原義」とまず、原義を述べ、さらに「現代語と同様に「びっくりする」の意で用いられることもあるが、多くは不意をつかれてはつと気づく、眠っているときにはつと目が覚めることをさしている」と続きます。「おどろく」の全体像はこれで十分把握できると思います。この後に、語義リストが示されます。

- ①びっくりする。
- ②はつと気づく。
- ③はつと目覚める。

本解説の語釈に続く用例を見てみましょう。②の例は「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」です。②の用例の定番といえる和歌ですが、この例に初めて出会った時「風の音にびっくりさせられた」という線で訳した人は少なくないはずですが、実は私も高校時代にみごとにひっかかった口です。既知の語と思える語も、一応は辞書を引いてみるのが大事という「教訓」を得たわけです。

③の例「物に襲はるる心地して、おどろきたまへれば、灯も消えにけり」〈源氏・夕顔〉にしても、「物の怪」と「びっくり」の相性が良いので、この部分だけに飛びついて間違えてしまうことは皆無とはいえません。

古今異義語は、確かに初心者に酷なところがあります。しかし、電子辞書の早引きなどは、ちよつとひかえて、「語義要説」などを少しまったりと読むなどして、「こんな意味があったのか」などと、驚きとして受け止めるならば、古典への扉がひとつ開くのではないのでしょうか。

(辞書編集担当者 加賀山悟)

## 『全訳 漢辞海』で 「森」を引く

品詞は辞書記述の根本です。英語辞典や国語・古語辞典など、品詞表示のない辞典は考えられないでしょう。しかしながら、漢和辞典はどうでしょうか。不思議なことに、品詞表示を示す辞書はごくわずかです。これは一つには、漢和辞典が、伝統的な漢文訓読法を重視し続けてきたことによるものでしょう。

『漢辞海』の編纂は、そういった「伝統」に対する反省から始まりました。「漢字を単に和訓に置き換えるのではなく、漢語 (Chinese word) として捉え、適確な例文から、実際の文脈にそって語義を読解する。したがって、古漢語を品詞別に分類し、文法をふまえた読解をほどこし、用例は現代日本語訳で、『全訳』した。『漢辞海』の巻頭に、監修 戸川芳郎先生のその決意が示されております。

実際に、73ページの「森」をひいてみましょう。私たちが日ごろ普通に理解しているところでは、「森」は、木々が林立して鬱蒼とした、名詞としての「も

り」ではないでしょうか。しかしながら、「森」の「語義」欄に明示された品詞区分には、形容詞と動詞は示されていませんが、肝心の名詞がありません。あれっ、と思っ  
てよく見てみますと、「語義」解説の後半、「なりたち」欄のさらに後に「日本語用法」欄があり、ここに名詞としての「もり」が示されています。つまり、漢語本来の用法としては「森」は形容詞または動詞として意識されるものであつて、名詞としての「森」はあくまで日本語独自の用法である、ということが、明確に峻別されて示されているのです。換言すれば、漢文の教材や入試問題で「森」が出てきた場合には、あくまで形容詞ないし動詞として扱うべきであつて、決して名詞として扱ってはいけない、ということになります。これは、古漢語文法に基づいた品詞別に語義を分類して解説した『漢辞海』でなければできない理解法といえるでしょう。

漢字 (漢語) に対して真正面から取り組んだ唯一の漢和辞典『漢辞海』は、漢字の奥行きを再認識させ、学習指導の重要な基礎の一つとなり得るものと、確信しております。  
(辞書編集担当者 武田京)

## 『ウィズダム英和辞典』で

### 「Irony」を引く

漱石作品には、吃驚<sup>びつぷり</sup>、当面<sup>まのあたり</sup>に、判然<sup>はつぜん</sup>といった、独特のルビが頻出するが、カタカナをあてたものも多い。  
 『それから』には、洋燈<sup>ランブ</sup>、燐寸<sup>マツク</sup>、絹帽<sup>シルクハット</sup>などが出てくる。肉匙<sup>フクリ</sup>、肉刀<sup>フキナ</sup>などは、仮に当時の読者がこの外来語を知らなかったとしても、漢字表記によって用途や形態がイメージできたろうと思わせる。

ほかにも、牛酪<sup>バクダ</sup>があるが、これなどは、英和辞典で butter を引いてもカタカナしか得られないことを思えば、なかなか工夫のこらされた表記と言えそうだ。

ルビではなくカタカナ語がそのまま使われていると、前例のような漢字によるイメージ喚起がない分、読者にはその意味するところが伝わりにくいことがあるかもしれない。

たとえば『ころ』には、アイロニー、イゴイストなどが出てくる。いずれも、カタカナ語としては通常使用の範疇だろうが、高校生ほどの程度イメージできるだろう。また、日本語作品で出会ったカタカナの意味不明語をどのように調べるだろう。

英語辞典で調べるとはまずないだろうが、ここでは試みに前者を引いてみよう（その場合、綴りが問題になるが、国語辞典を先に引いておけば、irony は簡単に得られる）。

『ウィズダム』では、irony は、先の butter とは違い、「アイロニー」で済まされることはなく、訳語「反語法」があり、語の解説も与えられている。

用例を読めばその使い方や語のイメージがよりはっきりわかるし、「知らないふりをする」という語源であることも示されている。抽象的でわかりにくい概念語の説明が、多面的に補われているのだ。

数項目先の形容詞 ironical に気づいて、その用例も併せて見れば、さらにこの語のもつニュアンスがつかみやすくなるだろう。

二か国語辞典⇨英和辞典は、一か国語辞典⇨国語辞典と違い、語の「説明」ではなく、「置き換え」をしているに過ぎない、などと言われることがある。たしかにそうした一面はあるだろうが、そんなふうに決めつけてしまうのはもったいない。「国語」を「英語」辞書で引いたついでなのである。

(辞書編集担当者 木村匡志)